

## はじめに

循環ワーカー養成講座は、環境問題と循環型社会に関する基礎的な知識と新しい視点を提供する年 5 回の連続講座です。

本年は、『水・食・エネルギー』と題して、われわれの生活に欠かせない環境資源をめぐる動向やその保全対策について研究者・実践者のお話をうかがいました。

第 1 回の丸紅経済研究所の柴田明夫氏には、世界の経済データを駆使して、人口 30 億人の新興国が本格的経済成長をとげる時代の、資源枯渇の危機とそれに対応した資源価格の高騰、資源争奪の状況についてお話をいただきました。リーマンショック後の一時的な資源価格急落に惑わされることなく、高い資源価格時代に対応した経済・産業構造、社会システムの構築が必要とのご指摘をいただきました。

太陽光発電所ネットワークの都筑建氏からは、個人住宅が 8 割を占めるという日本の太陽光発電の特徴が指摘され、再生可能であることはもちろん、エネルギーの自給、地産地消、災害時のセキュリティ、ピークカット、市民所有の分散型エネルギーであることの民主的な意義など、さまざまなメリットが紹介されました。また同時に太陽光発電システムの流通、設置、メンテナンスなどの面での多くの課題もご報告いただきました。

明治学院大学の神門善久先生は、「偽装農家」という強烈な用語で、産廃投棄、無秩序転用など現状の農地をめぐる問題をご指摘いただきました。マスコミや研究者が大衆迎合し、農業の本質的問題を隠蔽しており、最大の加害者は都市住民であり、最大の被害者は将来世代であるとの苦言は耳に痛いものがありました。

京都大学名誉教授、水制度改革国民会議理事長の松井三郎先生からは、水循環基本法の制定に向けた、縦割り行政を克服する超党派、産官学市民の画期的な協働での取り組み内容をご紹介いただきました。ご専門の環境ホルモン研究の話も興味深いものがありました。

えがおつなげの曾根原久司氏には、山梨県北杜市の限界集落における耕作放棄地の開墾から農産物の生産・販売、地域の活性化を、都市住民や企業と連携して行なっている事例についていきいきと語っていただきました。後日、循環研のフィールドワークとして、われわれも現地で開墾作業に参加させていただきました。

この記録集の作成にあたって各講師には、不備の多い記録原稿に丁寧に入力いただきました。この場を借りて、改めて心から御礼申し上げます。

また、ご協賛いただいた企業の皆様、ご後援いただいた環境省及び中央区には心より御礼申し上げます。

2010 年 4 月

特定非営利活動法人 循環型社会研究会  
事務局担当理事 久米谷 弘光